Japanese Association for Religious Studies

よって自らが果報を受け、その果報に依って生じたものに他ならないということが説かれているのである。

従来では、この問題は特に説一切有部におけるインド思想で暗に示される輪廻思想に付随して考察され、業の相続によって輪廻転生が果たされるとされてきたが、近年では「有部では表業・無表業を肉体の四大種に依止するものと立てるから死とともに捨す」とされているし、実際にそのような記述が*AKBh.*において見られる。すなわち、業は輪廻して相続せず、肉体が滅ぶとともに捨せられるというのである。これは業が身体の構成要素である四大種を拠り所とすることを根拠としての主張である。

しかしながら、*AKBh.* 世間品においては、現在存在している身体である本有だけでなく、死後の魂である中有の体もが五取蘊であるとされ、輪廻は業と煩悩の拠り所となる蘊によってなされるととかれていることや、あるいは、「業果の相続」は異熟因異熟果により成立するとされている。ここに、中有の四大種を所依にできるのではないか、また、異熟因が果を結ぶ際に今生の身体を亡くしていれば、その主体となるものを業以外の如何なるものを所依とすることができるのか、といった疑問が生じた。本発表では、無表業の輪廻性に関する考察を中心に、*AKBh.* を中心とする無表業に関する論述をまとめた。

まず共通の認識としては *AKBh.* 界品によると、無表色は色蘊（rūpa-skandha）のなかに分類される。また、それは四大種によってあるものである。そして、色（rūpa）と作用（kriyā）の自性を有すが、表業のように他に知らしめることができないために認識されないのが無表業であるとされ、さらに、定より生じる無表には形がなく、心心所の所依の体とは結びつかないとされる一方で、散地の無表は、表業とともに生じ、身体を離れないとされた。そして、有部は無表業実有の八証を列挙してその実有性を主張した。これに対して経量部は無表業の非実在性を主張し、無表の非色性を主張した。

世親はこのうち、経量部的な立場に立ちながらも、さらに蘊相続の非実在性を『雑阿含経』の一節を引用することにより証明しようとした。そこには、「第一義空義とは俗数法を除く」と書かれているからである。

しかしながら、『増一阿含経』の一節に、「因縁は仮号であり、因と縁の合会こそが第一義空義である」と述べられていたため、世親の挙げた蘊相続の非実有性の根拠とするにはふさわしくない可能性があることが分かるとともに、世親が蘊相続の非実在性を説いて、輪廻相続の問題を思種子の相続へと結びつけて五蘊相続から離れる説を支持していたことが窺い知れた。

さらに、世間品において有情の輪廻が否定されず、煩悩と業とによって果たされるものであると規定されたため、たとえ表業・無表業が死とともに謝滅するという記述があろうとも、業は残るものであることに相違ないであろう。

『大乗荘厳経論』菩提品の成立について

田口　恵敬

本稿は、『大乗荘厳経論』（以下、*MSA.*）Ⅸ章菩提品と『摂大乗論』（以下、*MS.*）Ⅹ章彼果智分の四智説と三身説の記述内

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

容を比較考察することにより、*MSA.* の偈頌（以下、*MSA.-k*）成立に Asaṅga が、*MS.* の製作に並行して携わっていたのかを検証することを目的としたものである。

MSA.-k では四智はそれぞれの性質について詳細に述べられている。一方 *MS.* で説かれる四智の記述は、五蘊の識の転依として説かれるのみであり、四智に関する詳細な解説は行われない。*MSA.-k* に詳細に述べられている四智の解説が *MS.* に挿入されていないことはどのように理解すべきであろうか。

現在の学説では、*MS.* と *MSA.* の成立の順序については *MSA.* が *MS.* に先行する説と *MSA.* = *MS.* として同時並行的に製作されたとする説とがあり、*MS.* が *MSA.* に先行するという説は筆者の管見の限りでは知られない。二書の内容からも *MS.* が先に成立したとするのは困難である。*MSA.* に示された四智説は当時としては新しい説であったと考えられることから、*MSA.* = *MS.* として同時並行的に製作されたとするならば、*MS.* に詳説が挿入されていないことには違和感がある。

MS. に四智の詳細な言説が見られないことは、引用の必要が認められなかったことを想定させる。つまり *MS.* 執筆時点において、Asaṅga が *MSA.-k* 菩提品の四智説について知り得ていたことと共に、往時のインド仏教諸派において、四智説が流布・受容されていたことを示すものであろう。

また *MSA.-k* では、三身説の基本的な形態が説かれている。その中で注目すべきであると考えられる偈頌は菩提品六六偈である。この箇所で説かれた平等（sama）と常住（nityata）という二つの表現が、*MS.* の X-35, 36a の記述に影響を与えていると考えられる。

MS. で説かれる「自性身が他の二身とどのように異なるのか」、という記述は *MSA.-k* に説かれた三身の平等と常住という表現の理解が困難であったことで、その記述に対する疑念が上がっていたことを伺わせる。*MS.* において前述の言及を行った Asaṅga はそれらの疑念に対する回答を意図していたのだろう。*MSA.-k* 菩提品の三身に関する言及は、四智と同様に、*MS.* への引用はない。*MS.* の他の箇所でしばしば *MSA.-k*（特に śloka 形式のものが多数であり、本稿で取り上げる偈頌も全て śloka 形式である）が挿入されていることに比べ、彼果智分の三身と四智の言及について挿入が行われていないことは特徴的である。特に三身説に限定して私見を述べれば、Asaṅga は *MSA.-k* 菩提品の三身説が未完成であると理解し、その再定義の必要を認めたから挿入を避けたのではないだろうか。

もし Asaṅga が *MS.* の執筆に並行して *MSA.-k* の編纂に携わっていたと想定すると、*MS.* にのみ見られるこのような記述が *MSA.-k* にないことは若干の無理があるだろう。Asaṅga が *MSA.-k* 菩提品の偈頌の編纂に関わっていないと想定すべきである。

以上のように、*MS.* の記述から、*MSA.* と *MS.* の成立時期に若干の隔たりがあることが想定される。*MSA.-k* 菩提品の成立に、*MS.* 製作に並行して Asaṅga が関与していたと想定することは困難である。

NII-Electronic Library Service